

## 論文

## ヴィクトリア朝期イギリスにおける自治体公園の誕生

バーケンヘッド・パークの成立を通して

芝 奈 穂

## はじめに

本稿は、1847年に、イギリスにおいて自治体が設立する最初の公園として開園したリバプール近郊のバーケンヘッド・パーク (Birkenhead Park) 成立の過程を明らかにしながら、イギリスにおいて19世紀中期に発達した公園制度とはいかなるものであったかを都市史 (urban history) の観点から考察するものである。ヴィクトリア朝都市の諸要素のうち、道路整備や住宅開発、駅やタウンホール等の公共建築物の開発については、それぞれいくつかの研究があるが、公園については、従来、その関心度は低かった。

バーケンヘッド・パークについては、これまでもいくつかのすぐれた研究があるが、それらはこの公園のデザインに関するものが多いように思われる。例えば、イギリスにおける公園研究の先駆的立場をなすチャドウィックの研究においては、バーケンヘッド・パークは郊外ランドスケープであるとし、公園内部のデザインを分析している。<sup>1</sup> 彼の研究を受けて、バーケンヘッド・パークをロマンティック・サバーク (romantic suburb) の系譜において論じた研究があるが、それらもデザイン分析にとどまっている。<sup>2</sup> また、ヴィクトリア朝公園の概論を記したコンウェイの研究は、19世紀イギリスにおける公園の発達を社会とデザインの関係から概観しているが、バーケンヘッド・パークについての記述は限られている。<sup>3</sup> さらに、本公園がニューヨークのセントラル・パークを設計した高名なオルムステッド (Frederick Law Olmsted) のデザイン思想に与えた影響について論ずる研究も多いが、ここでもデザインに特化されている傾きがある。<sup>4</sup>

これら先行研究の視座に立つとき、いかなる理由でそれらのデザインが採

用されたのか、それらのデザインにどのような意味がこめられていたのかといった点に興味を引かれる。本稿はこれらの点を手がかりとして、都市史の枠組みで公園をとらえ、最初の自治体公園として設置されたバーケンヘッド・パークの成立理由とその過程を概観することを主眼とする。具体的には、最初に、本公園が自治体公園として設立されるに至った動機を考察する。次いで、中産階級のための郊外建設と連動した公園づくりという観点から本公園を分析し、それらの事項が、ジョゼフ・パクストン (Joseph Paxton 1803-1865) による公園デザインにどのように表徴されていたのかを追究する。パクストンはヴィクトリア朝の進歩および技術発展の時代を体現する人物であり、庭師、植物学者、庭園デザイナーとしての地位を確立した。バーケンヘッド・パークをはじめ、いくつかの公園デザインを手がけ、後に1851年ロンドン万国博覧会の会場であるクリスタルパレスを設計した建築家としても名を馳せた。<sup>5</sup> 最後に、本公園が公共性という点において、いかに地域の環境と福利を守っていったかについても考察することにした。

バーケンヘッド・パーク建設に至る状況については、地方自治体文書である「改良委員会議事録」(以下、「議事録」という。なお、当該委員会は、1845年1月以降、「道路および改良委員会」と名称変更したが、両者とも「改良委員会」として扱う。)を用いて分析する。<sup>6</sup> 自治体文書は、公園研究全般において、これまでほとんど用いられることがなかったが、公園設計に至る状況、その財源の確保から設計家の選定、建設状況、開設後の条例制定に至るまでが記された重要な一次史料である。また、公園設計図も、従来の研究においては、挿絵程度に扱われていたにすぎないが、公園の全体像を把握する上での貴重な一次史料となりうる。「議事録」とパクストンによる設計図の比較検討は、本稿が用いた主要アプローチの一つである。

## 1. 19世紀における自治体設置の公園

公園 (public parks) とは、その名が示すとおり、すべての階級に開かれ、だれでも無料利用できる公共空間である。<sup>7</sup> それは19世紀の産物であり、イギリスを先駆けとしてヴィクトリア朝社会に誕生した。公園の出現は、産業革命以降における都市化の問題と密接に関わる。都市人口の急増と環境悪化に対

処するために建設されたからで、とりわけ、非衛生的な工場と狭い通りに雑居する家々に閉じ込められた労働者の健康状態は深刻であった。このような状況下、1832年に発生したコレラの大流行は、都市部における環境整備と衛生改革を推進する契機となった。

翌1833年、国の特別調査委員会である「公共遊歩道委員会」(The Select Committee on Public Walks) が設置され、各都市における公共オープンスペースの現状調査にあたった。当該委員会が、同年、議会に提出した「調査報告書」(以下、「報告書」という。)は、ロンドンをはじめ、マンチェスター、リバプール等の大都市において、労働者の流入と不動産の高騰がオープンスペースを欠如させたことを明らかにしている。<sup>8</sup> その上で、「報告書」は、労働者の健康維持のために、「新鮮な空気」(fresh air)のもとで運動できる場所を確保すべきこと、さらに「酒場での飲酒や、闘犬の試合およびボクシングの試合」見物など、低級な娯楽に興じる労働者のモラルを向上させるため、オープンスペースを提供し、洗練された娯楽としてのレクリエーションを促進すべきことをつとに強調している。<sup>9</sup>

「報告書」でも述べるように、ロンドンにはいくつかのオープンスペースがあったが、それらは、「一般大衆が無料で利用できる公共空間」という定義からは外れるものであった。例えば、ロンドンの広場、「スクエア」は都会における緑の空間となっていたが、常時、鍵がかけられており、「スクエア」に面した屋敷の住人しか利用できなかった。<sup>10</sup> また、動物園や植物園なども、人々が集う緑地という意味では公園に似た役割を果たしたが、入場料や学会費を払わなければ入れず、全ての階級に開かれた空間とは言い難かった。

さらに、ロンドンの王立公園(Royal parks)は現在、もっともよく知られた公園であるが、それも19世紀においては、完全に無制限の利用を謳っていたわけではなかった。リージェント・パーク(Regent's Park)は19世紀初頭、建築家ジョン・ナッシュ(John Nash)のデザインにより造られたが、当初は公園建設の資金回収も兼ねて、公園のまわりの富裕層向け住宅開発が公園造成とセットになっていた。<sup>11</sup> したがって、リージェント・パークは、初めから公園の全部が一般大衆に開かれていたわけではなく、徐々に門戸を開放していったのである。

「報告書」が出された後、階級に拘らずに全ての大衆が利用できる「公園」

を建設しようとする試みがいくつかなされた。が、全体としてその進捗は非常に遅いものであった。1840年、ダービー植物園(Derby Arboretum)と呼ばれる小公園が造られた。同植物園は、ダービーの実業家であるジョゼフ・ストラット(Joseph Strutt)の寄付によって造られたものである。ストラットは減少するオープンスペースを補うため、また、酒場やパブに代わる娯楽提供のため、さらには、労働者階級のモラル向上のために、11エーカーの土地を寄付し、公園として大衆に開放した。彼の動機には、「報告書」の影響を見て取ることができる。しかし、この公園は、すべての階級に開かれていたとはいえ、財政上の理由から、水曜日と日曜日以外は入場料が必要であった。<sup>12</sup> このように、ヴィクトリア朝初期においては、「公園」とは、その名が示すようには必ずしも公共空間とは言えなかったのである。

19世紀半ば、新たに登場したのが、自治体(local authority)設置の公園(municipal park)である。これは、王立公園や寄付による公園と違って、自治体に完全な所有権があり、それゆえ、一般の人々は無制限にアクセスできた。<sup>13</sup> その最初となったのが、1847年、リバプールの隣町に建設されたバーケンヘッド・パークだったのである。当該地の自治体が公園建設に取り組んだ直接的なきっかけは、マージー川を挟んでバーケンヘッドの対岸に位置するリバプール市の過密状態にあった。リバプールは造船、製粉などの工業で発達し、1841年にはすでに人口22万を超える大都市であった。当時、バーケンヘッドはいまだ田園的な情緒を残すとはいえ、リバプール近郊の新興都市として急激な人口増加に見舞われていた。1831年の人口が2,569人。1841年は3倍の8,223人。公園が完成した1846年には、4万人にまで膨れ上がった。<sup>14</sup> このため、将来、リバプールと同じような過密非衛生状態に陥らないように、あらかじめ自治体公園を造り、当該公園を中心にコントロールされた都市を創ることが、自治体の企図したものであった。<sup>15</sup>

## 2. 中産階級のための郊外として出発したバーケンヘッド・パーク

1842年、バーケンヘッドの自治体は公園建設を正式に決定し、公園用地獲得のため、バーケンヘッド改良条例(The Birkenhead Improvement Act)制定の承認を議会に求めた。翌年、当該都市改良条例は議会で承認され、自治体はす

くに公園用地買収に着手した。新たに「改良委員会」が設置され、鉄道建設業者兼実業家のウィリアム・ジャクソン(William Jackson)、造船業者マクレガー・レアド(MacGregor Laird)、さらに、国内屈指の鉄道建設業者トマス・ブラッシー(Thomas Brassey)等が用地買収にあたった。<sup>16</sup> この事業に際しての最大の難関は、いかに財源を確保するかに尽きた。というのも、当時、公園建設の財源に地方税を充てることは認められなかったからで、<sup>17</sup> 従って、寄付等の施しに拠るか、私的な事業に拠るかの二者択一しかなかった。<sup>18</sup> パーケンヘッド・パークの場合、後者が選択された。私的事業による土地開発を経る手立てである。すなわち、公園の縁に住宅地を開発し、公園とセットにすることによって近隣の地価を上げ、さらに、当該住宅地売却による利益を公園建設費に充てることで、一石二鳥を狙った。リージェント・パークの手法を取り入れたものである。<sup>19</sup> 彼らは全体で91ヘクタールの土地を購入し、そのうち51ヘクタールを公園用地とし、残りを住宅地として個々の宅地売却に充てることに決定した。

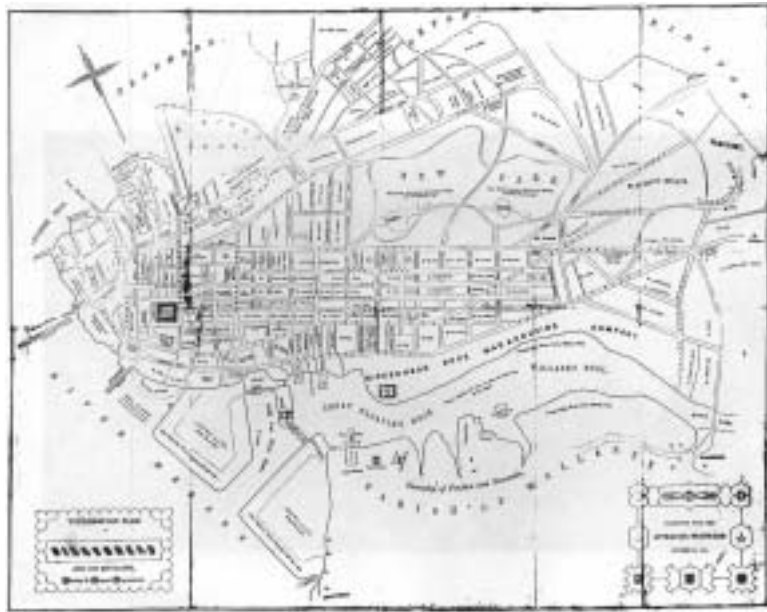


図1: Birkenhead in 1844  
Carol E. Bidston, *Birkenhead ... of Yesteryear* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, 1985)

これらの状況に鑑みるに、公園建設は当時、地元名士の代表からなる地方自治体による上から下への動き(top-down development)であったことが窺える。このことは、本公園が、裕福な商人や実業家たちの住む中産階級地域に配置されたことで示されている。1844年10月22日付け『リバプール・スタンダード』に載った当時のパーケンヘッド市街地図 図1<sup>20</sup>では、建設途上の公園は、格子状の住宅地によって囲まれた中心地に位置していることがわかる。これらの住宅地の大半は、ジャクソンやレアド、プライス等自治体メンバーやリバプールに仕事を持つ裕福な商人たちによって占められたのであり、新しい公園を中心とするパーケンヘッドが中産階級の風情を醸したであろうことが想像される。

住宅地開発という試みについては、当該公園の設計者パクストンにも当初からの確に指示されていた。パクストンは第6代デヴォンシャー公爵(Duke of Devonshire)邸チャッツワース(Chatsworth)におけるお抱え庭師として活躍しながら、植物学者および庭園デザイナーとしても頭角を現していた。1843年7月、第一回の「改良委員会」が開かれた際、パクストンに公園設計を委嘱することが決定された。<sup>21</sup> 彼が作成したパーケンヘッド・パークに関わる設計図 図2。以下、「設計図」という。では、おおよそ六角形をした敷地



図2: Paxton's Plan for Birkenhead Park

Liverpool Record Office, Liverpool



(91ヘクタール)の中央部に、カリフラワー形の公園(51ヘクタール)を配し、そのほぼ中央を南北に走るアッシュヴィル・ロード(Ashville Road)によって、東半分の上公園(upper park)と西半分の下公園(lower park)に分割している。このカリフラワーの外側にあたる公園周縁部には、規則正しく売却用宅地32区画を並べ、さらに、設計図の右下に各区画の値段を明記している。また、「議事録」においても、売却用地が重要事項として取り扱われている。1844年9月の「議事録」には、「住宅地開発のためのプランを決定する目的」でパクストンが招聘されたこと、1週間をおかずして、彼が「売却用地を32区画に分けた公園プラン」を作成し、「改良委員会」に提出したことが記されている。<sup>22</sup>

批評家間ではこれまで、「設計図」製作日時について、意見が分かれていた。クリース、パーミンガムおよびレガート等は、公園建設の議論が始まった1843年としており、パークランズコンソーシアムおよびソートン等は1844年、コンウェイが1845年としている。<sup>23</sup> しかしながら、前述したことから、「設計図」は、1844年9月、「改良委員会」が売却用宅地プランを作成するようパクストンに依頼したときに描かれたものと推察できる。住宅地開発が、このプロジェクトの最も大きな要素であったのである。

パクストンのプランに基づいて、宅地売却プランが作成され、1845年に売り出された。しかし、自治体の期待はずれ、売れ行きは芳しくなかった。そのため、売却プランはその後何度も修正された。にも拘わらず、結局、宅地売却は財政的に成功を収めた。というのも、売却用宅地価が公園の存在により高騰し、公園建設にかかる経費を補うことができたからである。<sup>24</sup> 住宅地開発からあがる収益によって建設費用をまかなうことと、近隣の地価をあげることという二つの目的はこのようにして実現した。これは、事業の財源獲得のためのきわめて現実的、かつ中産階級的な手法といえる。慈善的な事業とは言い難いが、実際のところ、この時代においては、自分たちの公園を創るための経費を捻出させるたった一つの方法であった。この宅地売却の方法は、その後、全国における自治体公園の発達の手本となり、さまざまな自治体で似たような方策がとられるようになった。

公園と宅地売却という組み合わせは、財源確保という面から優れた方策であっただけでなく、また、理想的な郊外開発という中産階級的価値観を体現

するものでもあった。実際、これまでも何人かの批評家たちが、パーケンヘッド・パークを公園と住宅地の組み合わせによる理想的な郊外開発の例として論じている。<sup>25</sup> 本公園の中央を南北に走るアッシュヴィル・ロード沿いには、商人や会社経営者等裕福な中産階級の住人が多く住んだことから、<sup>26</sup> 郊外開発の概念が社会的に達成されたことを思わせるのである。また、実際には実現しなかったものの、「改良委員会」は、公園のすぐそばに「赤石でできた美しいゴシック教会」を建設することを検討していた。<sup>27</sup> 教会は中産階級にとって必要不可欠なものであり、従って、このことから、本公園建設が理想的な環境を伴う郊外開発の一環であったことは明らかである。

中産階級的な価値観に彩られた郊外開発という理念は、「設計図」の中にも読み取ることができる。パクストンの設計は18世紀以降、貴族のカントリーハウスで流行した「風景庭園」(landscape garden)の伝統の上に立っている。チャドウィックは、本公園のデザインは、ハンフリー・レプトン(Humphry Repton)やナッシュ風のスタイルで設計されていると述べている。<sup>28</sup> 両者ともイギリスの「風景庭園」の基礎を築いた庭園デザイナーであるが、<sup>29</sup> 形式ばらないゆるやかな曲線を描く田園的風景の創出をその特徴としていた。パクストンはチャッツワースの庭師として、彼らの造園術にも精通していた。「設計図」においては、見晴らしのきく広々としたパークランド、その中に点在する木々や藪、くねくねと曲がる歩道、不規則な輪郭をもつ湖等、本公園のレイアウトは、「風景庭園」の伝統を踏まえている。

しかしながら、本公園設計においては、上流階級のカントリーハウスで展開される造園術を単にそのまま郊外に取り込んだというわけでもない。パクストンは、「自然と都市が調和した郊外の理念」とも言うべき新しいコンセプトのもとに、「風景庭園」の伝統を自分の設計の中に取り入れたと言える。パーミンガムは、パーケンヘッド・パークは、ロンドンのスクエアと同様、自然を都市環境に取り込むように設計されており、住人が都市にいながら自然と触れ合うことができるような、他から遮断された空間を有していると述べている。また、そのような計画設計によって誕生した郊外は、19世紀の中流階級に非常に人気があったとしている。<sup>30</sup> これは、メラーやテイラーなどの都市史家たちが、「都会の中に田舎を取り込む」(rus in urbe)と表現する19世紀イギリスで見られた自然を意識的に都市に取り込もうとする動きと連動

している。<sup>31</sup>

その背景にはもちろん、産業都市における急激な人口増加と悪化する環境、その対策として都市に自然を取り込まざるを得ない物理的な必要性などが挙げられよう。<sup>32</sup> さらに、概念的なレベルにおいては、都市における緑、すなわち自然の存在自体が、ヨーロッパ文明の質を計る物差しとして考えられていたことも大きな要因と言える。19世紀は世界経済の発展、科学および技術の進化、ならびに世界資源の搾取といった複合的な要素により、自然に対する認識を変化させた。とりわけ、植物学への知識熱と園芸業の隆盛は、ヴィクトリア朝の人々の自然界に対する関心を如実に表すものである。いわゆるプラントハンターと呼ばれる人たちが、めずらしい外国種の植物を求めて世界へと旅立った。彼らの働きはこの時代に新しい自然観をもたらした。<sup>33</sup>

自然に対する認識の変化は、都市の緑地に対する概念に対しても多大な影響を与えた。都市における緑地は、文明の証と考えられるようになり、公園を備えた理想的な郊外が中産階級を対象に作られるようになった。パーケンヘッドはそのような郊外開発の初期の例であった。従って、パーケンヘッド・パークは、表面的には18世紀以来の「風景庭園」の伝統を踏襲しているかに見えるが、実際は、都市の中に自然を取り込むことを深く意図した空間づくりとなっている。伝統的な造園術が、田舎の牧歌的イメージを紡ぎ出すべく、自然らしさ (naturalness) を演出するのに対し、パーケンヘッド・パークのような中産階級の郊外は、都市に自然を持ち込むことを文明の証として表現したのである。

これらのコンセプトは、パクストンのデザインの細部にまでも表現されている。パクストンがまず手がけたことは、大規模な排水工事であった。公園の敷地はもともと荒れ果てた沼地であったため、それを都市郊外の美しい自然景観に変換させるためには、排水工事を最優先しなければならなかった。しかも、「議事録」の記述から、公園排水工事が、町の下水システム構築と同時に進められたことが判る。<sup>34</sup> また、排水工事から本公園景観の最も重要な部分を占める湖が造成されている。<sup>35</sup> すなわち、湖の造成も公園の排水工事の一環であったが、それを単なる土木工事に終らせなかったのである。パクストンは、湖に優雅に入り組んだ入り江や岬を加えることによって、「より牧歌的で、ピクチャレスクな様相を付け加える」よう工夫した。<sup>36</sup> このように、

実用的ながら洗練されたデザインは、都市に自然を取り込もうとする明確な意図をもって、本公園の設計に取り入れられたのである。

同様なことは、公園のルートシステムのデザインにも見られる。これもまた公園周辺における町の道路建設と並行して進められた。<sup>37</sup> パクストンは、このルートシステムにおいて、歩道、巡回道路、および上公園と下公園を分割するアッシュヴィル・ロードによって、歩行と馬車、そして通り抜け交通の三者をうまく分離融合させた。<sup>38</sup> これにより、様々な公園ユーザーの用途に応えつつ、さらに、公園に自然で牧歌的な性格を添えるに至った。アメリカの公園設計家オルムステッドが、このパーケンヘッドでの循環システムに感銘を受け、セントラル・パークでの自身のデザインの中で、それに似たルートシステム、サンケン・ロード (sunken road) を作ったのは、しばしば指摘されることである。<sup>39</sup>

公園内の建物も、公園全体の印象を損なわないような形とデザインで配置された。最も重要とされたのは、ロッジである。これは、貴族の大邸宅入り口に門衛のための住居として置かれたもので、この伝統は19世紀公園においても取り入れられ、入り口に設置されるのが普通であった。ロッジは、いわば公園の顔であり、パーケンヘッド・パークにおいてもパクストンの最初の



図3: 湖のボートハウス

*The Illustrated London News*, 10 April 1847

仕事は、全部で7つの入り口に立てられることになるロッジの設計であった。<sup>40</sup> それらのロッジは、それぞれ異なった形式で設計され、ノルマン形式、チューダー形式、ゴシック形式、イタリア風と異なった趣を見せた。公園内の湖に架かる橋も同じように中国風、スイス風、田舎風と異なる形式で設計された。<sup>41</sup> 下公園のポートハウス 図3 は、ローマンスタイルで設計され、古典派の魅力を添えている。このように、公園内建物の設計において、多様な建築様式と、異国情緒あふれるイメージを取り込もうとする意図が見えるのである。

### 3. 中産階級のための郊外から一般大衆のための公共空間へ

本公園は、もともと中産階級的な価値観から生まれた。しかし、本公園が、階級に拘らず地域社会全体にその門戸を開いたことも、また事実である。公園が造られる直前の1843年に、パーケンヘッドの自治体が町の衛生状態について調査したレポートには、「地域社会の福祉のため、もっと完全に包括的な様々な事柄がなされれば、加えて、地域社会における秩序と都市の清潔さがより完全に保たれれば、社会の道徳的倫理観がより高まり、より健康的で幸せな状況が得られるであろう」とある。<sup>42</sup> 文中、「地域社会の福祉」、「地域社会における秩序と都市の清潔さ」、さらに「社会の道徳的倫理観」といった表現には、公衆衛生と福祉を地域社会に徹底させようとする中産階級的意欲が顕著である。パーケンヘッドの地方自治体は、本公園の建設を通して、地域社会全体に良好な環境および健康的なレクリエーションの場を提供することを目的の一つとしていたのである。<sup>43</sup>

また、地域社会の秩序を守り、道徳的倫理観を高めるためにも、パクストンおよび自治体は、公園内において一般大衆に洗練された振る舞いを促そうとした。1845年7月、パクストンは、「改良委員会」議長のジャクソンに手紙を書き、公園の「永久的な管理方法」について提言した。それは、常駐の管理人 (superintendent) を公園に置くことによって、「公園の全ての部分が年々、調和を保てるようにする」こと、および公園の「秩序を最大限に維持する」ことを提案している。<sup>44</sup> この手紙から、パクストンが、管理人に公園内の規律を徹底させる役割を期待していたことは明らかである。

彼の提案を受け、パクストンの弟子であり、公園建設を監督してきたエドワード・ケンプ (Edward Kemp) が公園管理人に任命された。パクストン自身は設計を委嘱された1843年夏から、最後に報酬を受け取る1846年頃まで、本公園の建設に関わったが、それ以降の管理および運営は、ケンプが取り仕切った。彼は1891年に死去するまで、公園内に建設されたロッジの一つに常駐しながら、管理人を務めた。<sup>45</sup> 彼の主な仕事は、芝刈りや、植物の支柱として鉄杭を注文すること等であったが、<sup>46</sup> 公園内で発生する無秩序な出来事への対処も求められた。たとえば、複数の若木が何者かによって切り倒され、持ち去られた時には、被害状況の調査を行い、公園における秩序の徹底にあたった。<sup>47</sup> さらに、ケンプは、警察とも連携して公園の管理にあたり、一般大衆の規律維持に携わった。常駐の管理人による公園管理という方法は、19世紀後半における公園運営の基本となったが、その原型を造ったのが、本公園の事例であった。

また、公園の形態そのものが、一般大衆に洗練された振る舞いを広めるのに適した形態であったともいえる。ヴィクトリア朝初期においては、中産階級の最も適当なレクリエーションは、散策 (promenading) と考えられていた。<sup>48</sup> 本公園の主たる用途は、そのデザインから明らかなように散策にあった。「改良委員会」のメンバーたちは、散策を奨励することが一般大衆をより優れた社会的行動に導くと考えていた。パクストンも自治体も、散策のためのスペースをより広く取ることを念頭においており、従って、公園内にスポーツ施設を含めることには消極的であった。その結果、「設計図」には、スポーツ施設は一つも組み込まれていない。「設計図」の大部分を占める牧草地のような緑の広大なオープンスペースは、全て散策のためであった。

しかし、スポーツはその後、徐々に公園内で認められるようになった。1846年5月、パーケンヘッド・クリケットクラブが「公園の平らな部分」をゲームのために使用したい旨、「改良委員会」に要請し、パクストンの判断に委ねられた後、「改良委員会」によって許可された。<sup>49</sup> アーチェリーは1850年に正式に認められ、<sup>50</sup> 輪投げ広場は1854年にクリケット・テントの後ろに設けられた。<sup>51</sup> フットボールは1861年に許可された。<sup>52</sup> 湖での水泳は禁止されていたが、スケートは認められた。<sup>53</sup> 1855年には釣りも決められた場所においてという条件の下、認められた。<sup>54</sup> このようにスポーツは地域住民主導



のもとに推進され、スポーツ施設は、パクストンのデザインに後付けで組み込まれていった。<sup>55</sup> 自治体およびパクストンは、散策という洗練されたレクリエーションのための場をも保持しながら、スポーツ施設やレクリエーションの場をも秩序ある環境の中に徐々に取り入れていったことになる。環境を守り、かつ地域の福利を図るこのような自治体活動の中に、地方自治の発展をみることができよう。<sup>56</sup>

地方自治精神は、1847年4月5日の開園日にピークを迎えた。図4 公園は1846年に完成していたが、開園は、バーケンヘッド造船所と倉庫のオープニングと、チェスター・バーケンヘッド間鉄道ラインの造船所までの延長の日とを同時に祝うために延ばされていた。その日の行事は、バーケンヘッド造船所委員会や、自治体のメンバー、およびランカシャー・チェスター間鉄



図4: 公園開園日の様子  
The Illustrated London News, 10 April 1847

道の幹部たちによって進められた。まず、造船所と倉庫が開かれ、その後、一行は開園のため公園へと向かった。式典が行われ、公園はすべての人に開かれた。式典の後、スポーツイベントが行われ、一般大衆は公園でクリケットやフットボール、「大袋かつぎレース、豚追いかけレース、柱登り、その他、

様々な珍しい憂さ晴らしのスポーツ」を楽しんだ。<sup>57</sup> 「改良委員会」による理想的な郊外を作るという宿願は、このような形で階級に拘わらず全ての住人が利用できるパブリックスペースの提供という実りのある結果に収斂した。

パブリックスペースという意味では、例えば、1851年のロンドン万国博覧会と比較できる。万国博覧会は最初の国際的な万博であり、世界各国から集められた豪華な商品や物品が陳列され、イギリスの科学的進歩と文明を世界に知らせた画期的な出来事であった。また、パクストンの設計による万国博覧会の会場となった水晶宮 (Crystal Palace) は、セント・ポール大聖堂の6倍という今までに類を見ない規模の建築物であった。莫大な量の鉄とガラスを使い、画期的なプレハブ (組み立て式) の造りであり、さらに、革新的なデザインの建築物であった。そのデザインの新しさとイギリス最初の催しという意味で、万国博覧会とバーケンヘッド・パークには共通点がある。

けれども、そのような物理的な側面だけでなく、むしろ、その中身の斬新さに意味があったのである。万国博覧会には、階級の壁を意識させない民主的な空間が窺えた。数多の労働者階級が訪れ、科学的発展の栄光を富裕層と共に祝った。その頃、発展を遂げていた鉄道に初めて乗って、万博は商業の場でありながら、学びの場であり、また娯楽の場であった。富裕層だけでなく労働者のためのスペースが都市に提供されたことになる。その意味で Crystal Palace は People's Palace と呼ばれた。Birkenhead Park が People's Park と呼ばれたことを考えると、両者とも、都市の人々に、娯楽および学びのためのスペースを提供したという意味でまさにパブリックスペースであった。さらに、そのようなスペースは、同時に文化、文明の力を表現し、国や自治体の精神といったものを体現するものでもあった。

両者の唯一の違いは、入場料の有無である。万博の方は入場料が課されたが、公園の方は無料であった。尤もパクストン自身は、この万博において、労働者階級が優先されるべきであると考えており、したがって、彼らの入場は無料にすべきであると説いた。実際は、この入場料無料の案は採用されず、入場料が徴収された。<sup>58</sup> パクストンは、民主的な理想を抱いていた人物であり、それをバーケンヘッドで培ったと考えてよいであろう。バーケンヘッド・パークは、一般大衆が何の制限もなしに自由に利用できる初の公園 (municipal park) となった。

前述したオルムステッドは、本公園を見学した際、公園の民主的なありようを描写している。パクストンが散歩用に配置した芝生のオープンスペースにはテントが張られ、男の子たちと紳士がそれぞれクリケットを行っている。また、遠くには羊が草を食べている牧草地があり、女の子と女性が楽しんでいる。牧歌的な空間の中で、散歩をしたりスポーツをしたりしながら、召使を連れだした中流階級と、一般大衆が混ざり合っているのを目の当たりにし、オルムステッドは「公園で楽しむ特権が全ての人々に平等に分け与えられている」ありさまを賞讃している。彼は、民主的と言われるアメリカでさえ、このような民主的な空間はないとして、本公園を「人々の公園」と形容した。<sup>59</sup> 彼はセントラル・パークを設計する際、循環システムや、歩行者道、オープンスペース設置、湖造成、牧歌的な風景の創造において、パクストンによるパーケンヘッド・パークのデザインを参照したのみならず、地方自治精神や民主的なメッセージを織り交ぜるといってもパーケンヘッドの例に倣ったのである。

## おわりに

パーケンヘッド・パークは、自治体の郊外創造から出発したが、後に一般大衆のためのパブリックスペースとして定着した。本公園は、イギリスにおける公園運動に多大な影響を与え、各産業都市において、パーケンヘッドを模した公園が次々と造られていった。本公園における財源確保、デザインおよびパブリックスペースという理念が、国内や世界の公園造りにも受け継がれていった。本公園はヴィクトリア朝を代表するにふさわしいオープンスペースであり、パブリックスペースであった。

## 注

本稿はヴィクトリア朝文化研究会第8回大会（2008年11月15日、於関西大学）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

1. George F. Chadwick, *The Works of Sir Joseph Paxton 1803-1865* (London: Architectural Press, 1961).
2. 例えば、以下の文献を参照した。John Archer, "Country and City in the American Romantic Suburb," *The Journal of the Society of Architectural Historians*, vol. 42,

- no. 2 (1983): pp. 139-56; 片木篤 『イギリスの郊外住宅 - 中流階級のユートピア』 東京、住まいの図書館出版局、1987年、p. 64。
3. Hazel Conway, *People & Parks: The Design and Development of Victorian Parks in Britain* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991).
4. Roy Rosenzweig, *The Park and the People: History of Central Park* (New York: Holt, 1994).
5. パクストンの生涯とその業績に関しては、以下の文献を参照した。Chadwick, *op. cit.*; Kate Colquhoun, *A Thing in Disguise: The Visionary Life of Joseph Paxton* (London: Harper Perennial, 2004); Brent Elliot, *Victorian Gardens* (London: B.T. Batsford, 1986).
6. Wirral Archives, *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, July 1843-January 1845. 当該委員会は、1845年1月以降、Birkenhead Road and Improvement Committeeへと名称を変更した。
7. Conway, *op. cit.*, p. 11.
8. Parliamentary Paper, *Report from the Select Committee on Public Walks*, 1833, p. 3.
9. *Ibid.*, p. 8-9.
10. Henry W. Lawrence, "The Greening of the Squares of London: Transformation of Urban Landscapes and Ideals," *Annals of the Association of American Geographers*, vol. 83, no. 1 (1993): pp. 90-118; 坂井文 「ロンドンの近代都市公園計画におけるスクエアの影響に関する歴史的研究」、『ランドスケープ研究』(2004): 67巻5号、pp. 439-42。
11. Conway, *op. cit.*, p. 12.
12. John C. Loudon, *Derby Arboretum: Containing a Catalogue of the Trees and Shrubs* (London, 1840). なお、Loudonは本公園の設計家である。
13. Conway, *op. cit.*, pp. 16-17. 1830年代のイギリスの諸都市においては、地元の裕福な商人や実業家からなる自治体が自治を執行行っていた。これらの自治体は、各都市によって the Municipal Corporation とか the Improvement Commission, the Manorial Court, the Surveyors of Highways といった異なった名称を持つ。
14. Clifford E. Thornton, *The Peoples' Garden: A History of Birkenhead Park* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, undated) p. 2.
15. Helen Meller, *Leisure and the Changing City, 1870-1914* (London: Routledge, 1976) p. 96.
16. Alan Tate, *Great City Parks* (London: Spon Press, 2001) p. 75. 彼らは地元の名士として自治体の中心的役割を果たしただけでなく、後に政治や経済界において重要な位置を占めた。
17. Conway, *op. cit.*, p. 46.
18. Meller, *op. cit.*, p. 112.
19. Philip J. Waller, *Town, City and Nation: England 1850-1914* (Oxford: Oxford University Press, 1983) p. 181.
20. この地図は以下の文献から転載した。Carol E. Bidston, *Birkenhead ... of Yesteryear* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, 1985).



21. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 14 July 1843.
22. *Ibid.*, 6 September 1844.
23. Walter L. Creese, "Imagination in the Suburb," in U.C. Knoepfelmacher and G.B. Tennyson (eds.), *Nature and the Victorian Imagination* (Berkeley: University of California Press, 1977), p. 59; Ann Bermingham, *Landscape and Ideology: The English Rustic Tradition, 1740-1860* (Berkeley: University of California Press, 1986) p. 171; Kim Legate, "Shrubbery Planting 1830-1900," in Jan Woudstra and Ken Fieldhouse (eds.), *The Regeneration of Public Parks* (London, E & FN Spon, 2000) p. 91; Parklands Consortium, *Birkenhead People's Park: Restoration and Management Plan* (Wirral: Metropolitan Borough of Wirral, 1999), Fig.1/9; Thornton, *op. cit.*, p. 6; Conway, *op. cit.*, p. 88.
24. Chadwick, *op. cit.*, p. 51.
25. たとえば、Chadwick, *op. cit.*, p. 53; Creese, *op. cit.*, pp. 59-60; Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 9.
26. Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 9.
27. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 22 January 1845.
28. Chadwick, *The Park and the Town: Public Landscape in the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> Centuries* (London: The Architectural Press, 1966) p. 91.
29. レプトンとナッシュについては以下の文献をそれぞれ参照した。Stephen Daniels, *Humphry Repton: Landscape Gardening and the Geography of Georgian England* (New Haven: Yale University Press, 1999); John Summerson, *The Life and Work of John Nash, Architect* (London: Allen and Unwin, 1980).
30. Birmingham, *op. cit.*, p. 172.
31. Meller, "Rus in Urbe, Urbs in Rure: Changing Responses to Green Open Space in European Cities, 1850-2000," a paper for VI International Urban History Conference, Edinburgh, September 2002; Hilary A. Taylor, "Urban Public Parks, 1840-1900: Design and Meaning," *Garden History*, vol. 23, no. 2 (1995): p. 203.
32. Creese, *op. cit.*, p. 58.
33. Meller, "City and Nature: Green Open Spaces in European Cities," unpublished.
34. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 8 September 1843 & 4 March 1844.
35. *Ibid.*, 7 March 1844.
36. *Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 18 June 1846.
37. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 1 & 29 August 1844.
38. *Ibid.*, 7 & 28 March 1844.
39. Tate, *op. cit.*, p. 73.
40. *Birkenhead Improvement Committee Minutes*, 20 November 1843 & 15 February 1844.
41. 3つの橋のうち、スイス橋だけが現存している。
42. Samuel Stansfield, *Report of the Sanitary Condition of Birkenhead* (Liverpool, 1843) quoted in Thornton, *op. cit.*, p. 3.
43. Thornton, *op. cit.*, p. 3.

44. バクストンの手紙は「改良委員会」で朗読された。*Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 27 August 1845.
45. Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 8.
46. *Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 24 September and 1 October 1845.
47. *Ibid.*, 11 February 1846.
48. Monique Mosser and Georges Teyssot (eds.), *The History of Garden Design: The Western Tradition from the Renaissance to the Present Day* (London: Thames and Hudson, 1991) p. 18.
49. *Birkenhead Road and Improvement Committee Minutes*, 6 May 1846.
50. *Ibid.*, 27 June 1850.
51. *Ibid.*, 3 April 1854.
52. *Ibid.*, 20 November 1861.
53. *Ibid.*, 28 January 1846.
54. *Ibid.*, 28 June 1855.
55. Conway, *op. cit.*, p. 90.
56. Parklands Consortium, *op. cit.*, p. 2.
57. 式典の様子は、本稿に転載した 図3 および 図4 の図とともに、*The Illustrated London News*, 3 & 10 April 1847に報告された。
58. Colquhoun, *op. cit.*, pp. 179-80.
59. Frederick Law Olmsted, *Walks and Talks of an American Farmer in England* (New York: 1852) pp. 52-53.